

## ピチカート

竹沢恒男

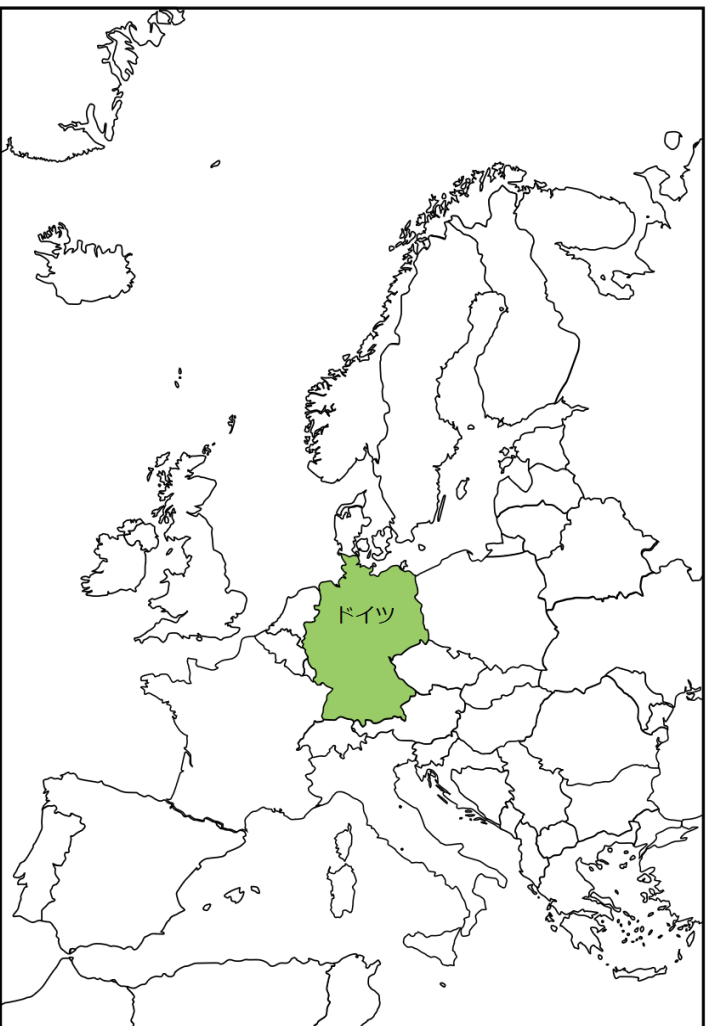
勤続三〇年の休暇を使って初夏のドイツを訪れた。

大学卒業と同時に入社した電機メーカーの北陸事業所に勤め続けていた。会社での毎日は繁忙を極め、しかも忙しさは日を重ね、年を経るごとに増してきた。そんな日々は充実したものではなかった。しかし気がつけば定年まで一〇年を切っている。ひとつの節目にここで思い切って休みを取ることにした。これまで有給休暇をほとんど取っていない私が、いくら権利とはいえ二週間の休みを取るといので職場の同僚も少なからず驚いた。二か月前に会社に届を出したら「何かあったの」「どの部署に変わるんですか」と言われた。何もないし、もちろん休暇が終わったらまたこれまでの仕事に戻る。休み中の業務代行を上司、同僚に依頼し、休暇の準備はぬかりなく進めた。

出発の日、空港は静かだった。六月の月曜の朝は観光目的のような人はまばらで、私のこれまでの出張のようにスーツ姿の人たちが無口で足早に通り過ぎていく。しかし何回となく利用してきた空港なのに、これほど澄んだ空気を感じたのは初めてだ。たぶん今日のスーツ姿の人たちも、この空間を感じることもなくいるのだろう。私自身、こうやって空っぽで立っていることに感慨を覚えずにはいられない。

出発の二週間前、工場でのちよつとしたアクシデントが思わぬ顧客トラブルになってしまい、関係者とその対応に忙殺されることになってしまったのだ。連日深夜までの残業になった。残念だが休暇はあきらめなければならぬか、と一時は観念した。ようやくある程度めどがついたのは、出発予定日の三日前だった。周囲から反発されるのは承知の上で予定どおり出発することにした。「特別な予定がある訳じゃないんだから休暇はずらしたら」、「ちやんと解決まで見届けてから休みにしてくれよ」誰からも言われた。「いったんずらしたら次はいつになるかわからないから」むきになって反論した。これまでもずっと仕事優先できた私からは考えられないことで、言った後で自分自身驚いた。しかし、ここまで言うってしまった以上、もう後には引けない。三〇年かけて築いた信用が一瞬で崩れてしまう、などとは思わなかった。おかげで顧客トラブル対策の次は、休暇のための社内調整に追われることになってしまった。すったもんだの末、何とか許可は得られた。しかし携帯とパソコンは旅行中も必ず携行して毎日メールを確認すること、場合によっては休暇を短縮することになるかもしれない、との条件を付けられた。それと周囲の目が変わったように思った。家族には声をかけた。働いている妻は、その時期には休暇は取れない、という。大学生の二人の子供もゼミだ、サークルだといつて行けないとの返事だった。みんなちよつと無理をすれば何とかなるのではと思えた。しかしその気はないようだった。私としても家族みんなに声はかけたものの、行けないとの返事を待っていたのかもしれない。一人思いつくままめぐってみよう。

直前までのドタバタで、準備は何もできなかった。往復のエアチケットとドイツ到着日のホテルをネット予約しただけだ。二日目からの宿は旅行しながら決めることにした。  
何もなかった。ましてや、ドイツには、わが人生最大の驚きの体験が待っていたようとは、思いもつかなかった。



チェックインを済ませると、すぐ空港内書店へ走り、目についたドイツに関する本、ドイツの詳細地図を両手に抱え込みまで買った。一般的な旅行ガイドはパスした。手に入れたらさっそく、といきたいのをこらえてまっすぐWiFiコーナーへ行き、パソコンを開いてメールのチェックを始めた。会社からのメールがす

でに十数通入っている。タイトルを追っていくと、”トラブル再発”、”緊急事態！””すぐ会社へ連絡せよ”等々の文字が並んでいる。予想どおりだ。

おもむろに最初のメールを開く。

「今どこですか。この前教えてもらった予定どおりだったら、空港でチェックイン終わって、やおらパソコン開いたってとこですか。大慌てでメール開けたでしょ。」トラブル再発“の件名が目飛び込んできたでしょうから。安心してください。この前のトラブルはもうちゃんと收拾しています。ほんとにトラブル再発だったら、すぐ電話します。会社モードから休暇モードに切り替えてもらうためのメッセージです。どうぞ楽しい旅行を。おみやげ待ってますよ。あつ、でも毎日のメール確認はお忘れなく。これしなかったら有給休暇じゃなくて無断欠勤扱いですからね」ほかのメールも大同小異で、同僚が、にたにたしながらキーボードをなでている姿が目には浮かぶ。こっちはトラブル対策会議で決めたこと以外に、これまでの経験から実はほかにもあちこち手を打ったんだ。みんな時間に追われていたからいちいち説明しなかったけど。休暇明けにはゆっくり説明するよ。とメールを返そうと思った。が、別の内容を送ることにした。

「ありがとう。有意義な旅行にさせてもらうよ。もちろん毎日のメール確認は忘れないから。といたいたいところだったのが、たいへんなことになってしまった。飛行機がハイジャックされてしまったんだ。いや、まだ離陸前からハイジャックというのはおかしいのかもしれないけど、今はそんなこと言っている状況じゃ

ない。覆面をして銃を持った航空会社の作業服姿の五、六人が客室通路を交互に歩いている。操縦室やファーストクラスにはまた別にいるだろうから、全部で十人くらいじゃないか。最初の機長アナウンスは、完全に裏返った声でエンジン点検のため出発が遅れる、といていた。たぶん空港内でもそう放送されているんだろう。今のところまだ騒ぎにはなっていないようだ。でも、十台以上の作業車がこの機を取り囲んでいて、周りの駐機場ががらんと空いているから、他の空港関係者や一般の乗客が異変に気付くのは時間の問題だろう。会社でのトラブルなら何とかできて、こればかりはなすすべがない。へたなことをしたらほんとに命があぶないんだ。あっ、まずい。犯人の一人がこっちへ向かってきた。パソコンかちやかちややっていたのに気付いたのか。

よかった。通り過ぎてくれた。でもこれからどうなるかわからない。そのうち犯人たちはパソコンに気付くだろうから、送るのはこのメールだけにする。社内の関係者に転送しておいてくれ。メール送信が終わったら会社に迷惑がかからないようにパソコンに保存してあるメールやメールアドレス、それにメール設定はすべて削除する。だからこのあとはメールのやりとりはできなくなる。もし事件がぶじ解決してドイツに行けたとしてもメール通信は無理だ。すまないが、今の状況ではしかたない。毎日のドイツのできごとは業務報告みたいにこまめにパソコンに入れておいて無事帰国できたら見せるよ。まとまったものになったら小説にでもできたらいいかな。それじゃ」

WiFiコーナーは、チェックインカウンター以上にビジネス

客とおぼしき人たちばかりだった。皆忙しい目で画面を追い、読み終わるとすぐさま何か打ち込んで、次の瞬間には送信している。私もこれまでの出張の場面ではこうだった。そんな中、にやけながら、またときには読み返しながらゆっくりとキーボードに指を添えている今日の私は明らかに異端者だったようだ。読み返したあと修正して、また読み直して変更するのを繰り返しながら、スマホだけではなくパソコンを持ってきてよかったと思った。やがてメール送信を終えてパソコンの画面を閉じたときには、スーツ姿の人たちからの奇異な視線がまとめて浴びせられていることに気付いた。いいんだ。今日から休暇だ。

完全に切り替えるため、これまで利用したことのない有料待合室に入ってみたところ、Wi-Fi空間であることがわかった。しまった、とは考えず、ゆったりとしたソファに深く腰かけていはさっきの臨場感あふれる事件現場はレポートできなかつたはずだ、と思うことにした。モーツァルトが静かにゆっくりと流れている空間で、ソファに浅く座り直して背筋を伸ばしそっと目を閉じてみると、からだ全体が30年間と入れ替わってゆくのがある。

今度のドイツは別に大きな目的があつてのことではなく、異国の日常を垣間見ながら、これまでの人生と会社生活をいったんリセットしてみようと、ふと思つたに過ぎない。帰国後はこれまでの毎日に戻ることになるだけだ。せっかくなので休暇の一四日間はずべてをドイツ旅行にあてるものの、あちこちの観光地を慌ただしくめぐる団体のパッキングツアーではなく、むしろ観光とは無縁

の地方の小都市を一人でていねいに訪ねてみるつもりだ。お決まりの観光地をめぐるのではないから一般の旅行ガイドブックは読む必要はないし、オリジナルな旅行であってもあらかじめ立てた計画に従って移動するとなるとパックスツアーと同じになってしまう。地図とパソコンを携えて思いつくままのムダだらけの旅行でいい、というのが基本だ。とはいえ全く何もなく現地で思いつくまま、というわけでもない。

ひとつは、いろいろな町の博物館をめぐってみることだ。ドイツは、州や都市ごとに独自の歴史や文化を持っている。そして、それらはちゃんと博物館に展示されているそうだ。ネット地図でドイツをランダムにのぞいてみると、どんなに小さな町にもちゃんとミュージアムがある。これらを時間の許す限りじっくりと回って、その町の心まで理解したい、そんなふうに思った。

博物館というと、ひっそりたたずむ過去の遺物の保管倉庫、古色蒼然、一部の好事家かヒマ人が行くところといったイメージがあるかもしれない。しかし少し海外に出てみるとこんな印象が当てはまらない国、地方の方が圧倒的に多い。これまでも、仕事で外国に数週間滞在していると、休日には現地のビジネスパートナーが近辺を案内してくれることがあった。このとき多くはまず博物館へ連れて行ってくれた。博物館でその国の歴史や文化を総合的に知ることができた。何といっても、博物館の館内に身を置いてみてほんとにわかるその国のアイデンティティ、誇り、そして心が凝縮されていた。博物館は広く外部の人に自国を紹介するとともに、国民をまとめる具体的なツールだった。いくらネット

上でいろいろな情報が簡単に得られるようになって、博物館という現実の場で初めてその国が理解できるようになるとわかった。有名な観光地はプロの手による美しい写真が旅行ガイド誌をはじめ、それこそネット上で簡単に見ることができるともかかわらずその観光地を訪れる人は後を絶たない。動画投稿サイトの影響でCDの売り上げは減っても、コンサートの観客動員数は大きく増えている。ドイツの初めて名前を聞く小さな町の博物館は、何を来訪者に語ってくれるのだろうか。

二つ目として、鈍行列車の旅を楽しみたいと思っている。これは日本国内での経験の応用だ。ビジネスに限らず、行楽でも旅行といえば目的地までの時間をいかに短縮するかがひとつのポイントで、そのために航空機や新幹線を使うことがあたりまえになっている。だから秘境として売り出すにも空港や新幹線駅の近くでなければならぬ。一日数本しかない電車やバスを延々乗り継いでようやくたどり着くようなところは秘境の地にはなれないのだ。

しかし鈍行列車に一度乗ってみると、地域外に住む人間がこんなおもしろい場所を利用しない手はないとわかる。乗客の降り降りはひんぱんで、車内で聞こえる会話は、数駅過ぎたくらいでもことば使いやイントネーションが微妙に変わってくる。たまたま座ったボックス席の向かい側の人、ベンチ席の隣り合わせた人と、とりとめのない会話ができるともつとおもしろい。これだけ通信ネットワークが発達しても、地元の人には当たり前前のことがいくらネットで検索しても出てこないことがしばしばある。この手の話を聞くと、とても得した気分になる。訳知り顔で日本の町はど



こも画一化されていてみんな同じ、などという人は、空港や新幹線駅からすぐの観光地しか知らないからだ。

幸いドイツの鉄道は全国くまなく張り巡らされていて、特急だけでなく各駅停車の列車も十分あるようだ。ゆとりある時間を利用して、手段ではなく目的としての鉄道の旅を楽しめれば、と思う。

それともうひとつ。クラシック音楽に身近に接してみたい。立派なコンサートホールでかしまってありがたく聞く日本でのクラシック音楽鑑賞ではなく、自分たちの音楽として、もう少し身近に楽しむ世界に入ってみたかった。これもその場へ行かなければ体験できないことだろう。

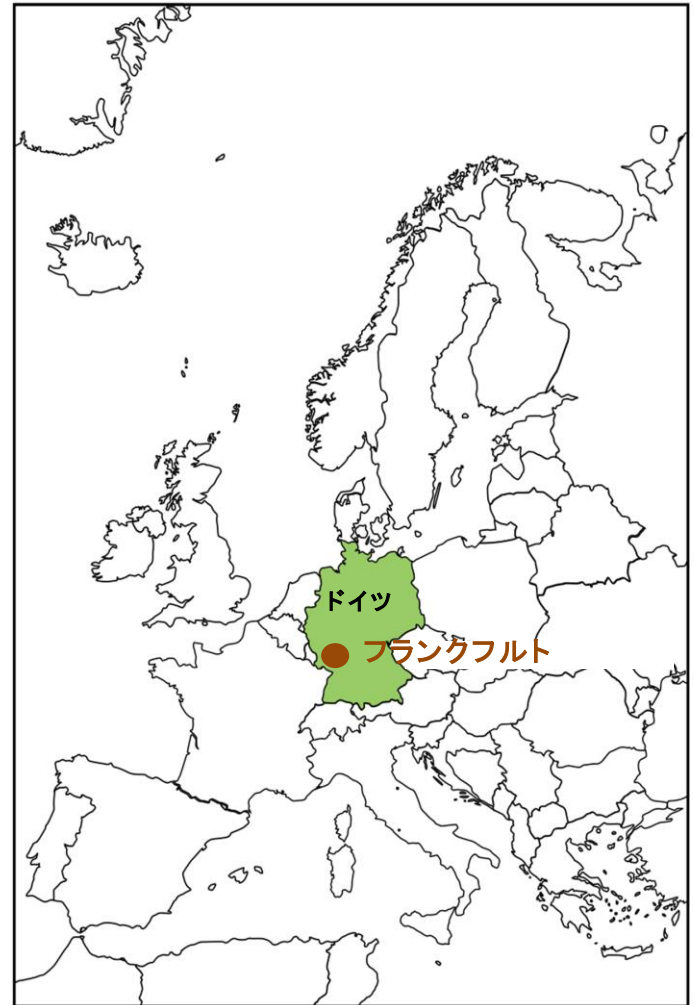
今日では、世界のあらゆる地域のさまざまな音楽を身近に耳にすることができ、ことになっている。音楽は、国境だけでなくことばや文化を越えてまさにグローバルに広がっている、ように見える。しかし、広く流通している世界のいろいろな音楽は、すべてヨーロッパのクラシック音楽から始まった楽譜に書かれている。そしてクラシック音楽で使われている音階上をメロディが流れ、クラシック音楽で確立したハーモニーを使って音楽が成立している。世界の多彩な音楽は、クラシック音楽の土台に乗って、初めて認知されるようになっていく。普段耳にするあらゆる音楽は、このようにクラシック音楽、つまりグローバルスタンダードに変換されたものだ。

音楽でのクラシック音楽に比べると言語での英語などまだまだだ。音楽は、すでにフォーマットがひとつになってしまっている

のだ。こんな汎用性のある音楽形式を生み出した地域はどんなふうに音楽に接してきたのか、また今とらえているのか、本場でクラシック音楽を堪能するだけでなく、その周囲のことも考えながら一ドイツ市民となってコンサートへ足を運んでみられないだろうか。

そうこう考えながら、先ほど買ったドイツ地図を片手にネットで博物館と鉄道地図、それにコンサートホールを探しては、次々とパソコンにダウンロードしていった。

心地よい目覚めで気がついた。どうやら機内ではすぐに寝入ってしまったようだ。飛行機の中ではダウンロードしたのをゆっくり確かめるつもりでいたのが、機内食とふだんより少し多めのビール、それと三〇年分の切替えに脳がちよつとばかりリセット時間を要求したようだ。機がフランクフルト・マイン空港への着陸準備態勢に入ること告げるアナウンスが、妙に新鮮に聞こえる。



翌日、さっそくフランクフルトめぐりに入った。ビジネス都市のイメージが強く、実際歩いてみるとドイツ内外の企業の高層ビルが立ち並んでいた。しかし、私の旅の目的にも合致した街であった。ビジネス街からも近いメイン川沿いのシャウマインカイには博物館通りといわれるほど一本の道路に面して博物館が並んでいる場所があった。中心部の高層ビル街は、次々と瞬間が飛んできて入れ替わり続けているといった感じだったのに対し、メイン川を渡ると激しく入れ替わる空気はなくなり、連続する時間がゆったりとたたずんでいるようになる。そこにはシュテール美術館、ドイツ情報通信博物館、ドイツ建築博物館など迷うほどある。もともと、ドイツには六二五〇もの博物館があるということなので、これくらいで迷ってはいけけないのかもしれない。最初は試しに一番マイナーな外観の世界文化博物館に入ってみた。

充実ぶりに驚かされた。世界文化という博物館名はたぶん名前負けしているんじゃない、という先入観は、すぐ吹き飛んでしまった。オセアニア、アフリカ、アジア、アメリカをフィールドとした民族学の充実した展示、映像で、工芸品は六七〇〇点あるのとこのだった。あまり知られてなく、事前の情報が少ない博物館こそ行って確認すべきだし、また、実際に訪れてみると十分な知的満足を与えてくれることがわかった。大きな収穫だったので、博物館通りを次々とはじごした。ホテルでは、充実した旅行初日を過ごせた満足感と歩き疲れからゆったりと眠ることができた。



翌日は、フランクフルトから列車で一時間半ほどのコブレンツへ行った。人口一〇万人ほどの町ながら、ここの中部ライン博物館が最近新築移転してとてもおもしろいとホテルのフロントで聞いているのだ。ここも期待を裏切らなかった。一七〇〇㎡あるという常設展示フロアには中世から現代までの絵画や彫刻がわかりやすく展示されていた。絵画だけでも四〇〇点あるとのことだった。日本の地方博物館では考えられない内容で、ほかに企画展用の部屋や、この地方の美術を扱った場所もあった。

別の階には、コブレンツがライン川観光の拠点であることに合

わせて、最新のA V機器を使っているいろいろなライン川下りを疑似体験できる施設もあり、多くの人でにぎわっていた。

また、ここコブレンツは、ドイツ出身の大作曲家であるベートーベンの母、マリア・マグダレーナ・ベートーベンが生まれた町であることを知った。記念の家があり、関連資料が展示されているとのことだった。せっかくの気ままな旅だから、ベートーベンの母の生家を訪ね、その次にコブレンツから北西に一〇〇kmほどのボンへ行つて、今度はベートーベン生誕の家を見る。これがクラシック音楽ファンの正しいルートかもしれない。しかし、そうはしなかった。今回の旅のもうひとつの目的の身近にクラシック音楽を楽しみたくなったのだ。気ままそのものの旅だ。

とりあえずミュンヘンをめざすことにした。旅行というのにとりあえず、というのはおかしな話ではある。しかし、そうなのだ。ドイツ国内ならクラシック音楽をやっているホールは、いたるところにあるとはいえ、ある程度の規模の都市のほうがメニユは豊富だ。ドイツのほぼ中央に位置するコブレンツから北の都市へ行くか。それとも南の街をめざそうか。地図を眺めてみて、音楽の都であるオーストリアのウィーンが近くなる南にした。ドイツ南部の中心都市がミュンヘンだ。ネットで調べてみると人口は一四〇万人でドイツでは三番目に大きい。バイエルン国立歌劇場、レジデンツ劇場、ガシュタイクなどすぐれたホールが多数あり、連日充実した内容のコンサートが行われているようだ。

とはいっても一目散にミュンヘンに向かう必要はない。やりたかった鈍行列車の旅にすることにした。特急で四時間ほどでミュ

ンヘンへ行くのではなく、車窓から、また気が向いたら途中下車して沿線の町村を楽しみながら時間を気にすることなくゆっくりミュンヘンへ向かおう。



次の日、実際に乗ってみると正解だった。一番身近なレベルでのドイツの日常生活に直接入りこむことができた。居合わせた乗客たちは、地元ならではの小さな町の話題も、申し訳なくなるほどいいねいに解説を加えながら教えてくれた。ドイツ国内で日本人を見かけることは珍しくなくても、ローカル線でその地方の話を熱心に聞き入ってくる中年の日本人男性は車内さぞかし目立つたのだろう。

そうこうしながら出発から一時間半くらいたっただろうか。列車が後続の特急を先に通すため小さな駅で停車していたときだっ

た。窓から外の風景を眺めていると、住宅が整然と立ち並ぶ中に、  
やっと見えるほどの小さな看板が掲げられた家があった。看板に  
はミュージアムと書かれてある。

看板に合わせたようなこじんまりとした建物で、周囲の一般住  
宅の景観に入り込んでいる。ミュージアムというレストラン、  
それともブティックか。発車まで十数分あったので、パソコンを  
開いて付近の詳細地図を確認してみると、確かにミュージアム  
となっている。店の名前ではなくてほんとに博物館なのだろうか。  
今度はドイツの博物館サイトをのぞいてみたものの、載っていない。  
もつともサイトの説明によれば、ここに掲載されているのは  
ドイツ博物館協会に加盟している博物館だけであって、加盟して  
いない博物館もドイツ国内には相当数あるとのことではあった。  
もちろん観光案内には全く出てこない。

なぜか気になりだした。確かにドイツの小さな町の博物館をめ  
ぐるのだが、このまま旅の目的の一つではあった。時間にも  
余裕はある。とはいっても、勤続三〇年の記念すべき二度とない  
長期休暇ではるばるドイツへ来ているのも事実だ。わざわざ途中  
下車して行ってみたら気のきいたレストランならともかく、あま  
りにもふつうな店を確認しただけだったら悲しい。そこまでの時  
間はない。

が、看板をもう一度じっくり見てみると、まだ真新しい。あく  
まで控えめながら博物館を主張している、というか博物館への来  
訪をしっかりと呼びかけているように思えてきた。それに静かな住  
宅街にぽつんと商店というのは、実際考えにくいではないか。と



いうことは、ほんとに博物館ではないだろうか。まあ、住宅街にぽつんと博物館というのも珍しい部類には違いないが。しかし博物館であつても、知名度はもちろん、質、量すべてにおいて一流とは無縁であることは疑いの余地がないようだ。ためしに周囲の乗客に聞いてみても、知らないとか、確か博物館のはずだと思う、といった程度で、地元においても恐ろしく隠れていることがわかっただけだった。しかし、看板は、博物館は存在し来訪者を待っていることを静かに、かつ明確に語っている。どうしたものか、あれこれ考えをめぐらせているうちに時間だけが過ぎていった。結局、自分でもよくわからないまま発車直前に列車を降りていた。

改札を出てすぐミュージアムに向かった。着いて実際の建物を眼にすると、意外に大きかった。駅の列車内からは別の建物の陰になって一部しか見えなかったからだろう。同じ面積の範囲に広めの住宅が四、五軒納まっていた。しかし、奇をてらったものではなく、また権威を押し付けるようでもない素直な外観は、住宅街にそっと溶け込んでいた。

さっそく受付らしきところへ行ってみると、手書きのメモ紙が置いてあり、このボタンを押せ、と書かれていた。よくわからなのまま、しつかり押してみた。しばらくして返事があり、やがて柔和なおじさんが出てきた。六〇歳台半ばくらいか。日本のイメージでいえば、長年律儀に勤めた会社を数年前に定年退職し、今は元気に第二の人生を謳歌している、といった感じだ。逆に先方は見慣れない人間に驚いたようだった。そこで日本から休暇を取ってドイツへ来たこと、各地の博物館をめぐっていること、クラ

シック音楽が好きで、たまたま立ち寄ったコブレンツでコブレンツがベートーベンの母が生まれた町であることを知ると、コンサートホールでのクラシック音楽鑑賞がしたくなり、連日いろいろな演奏会が開かれているミュンヘンに向かっていること、ミュンヘンまでの旅自体も楽しむためにローカル列車を乗り継ぐことにしたこと、そしてローカル列車の旅の途中、停車した駅で偶然この博物館の看板が見え、引かれるように来たことを順に説明した。聞き終えると、おじさんはその笑顔を一層くずし、内部へ手招きしてくれた。はるばる日本からようこそ、案内しましょう、という。好意に甘えることにしてついて行った。歩きながらの説明によると、ここはこの町だけではなく、ドイツ南部のバイエルン州を中心とした地域の歴史研究博物館とのことだった。いわゆるおらが町の博物館とは一線を画すようだ。その一方、個別の分野に特化した大学の研究室みたいなものではなく、幅広い分野、自由な視点から地理や歴史を紐解いてみようとしている。このため、大学とか専門分野にとらわれず、多くの人が個人で、またグループで研究にあたっているとのことだった。大学の先生もいれば一般の会社員や商店主も在籍している。もちろん学生も多い。このおじさん、ルイス・シュルツさんといえば、会社をリタイアしたのを機に、以前から興味があった地理、歴史を本格的にやろうとこの博物館に出入りするようになった。そうしたところ、現役時代のマネジメント経験を買われて館長にさせられたそうだ。おかげで研究はちつとも、といっってはいたものの、館長職も楽しんでいると見受けた。初対面とは思えないほど打ち解けた感じにな

った。お互いファーストネームで呼び合うことにした。

通された展示室は広く、整然と陳列されていた。個々の内容はこれからの説明を待つものの、非常に充実しているとの印象だ。駅ではほんとに博物館か、と考えていたことが恥ずかしくなった。もう一つの印象というかこの博物館に入ってから率直な疑問は、どうして見学者は私一人なのか、ということだった。相当の内容がありそうなのに、なぜほかに見学者がなく、恐ろしいほど静まり返っているのか、不思議だ。

ルイスも気付いたのか、説明を止めて話し出した。「あなたが、リニューアルした展示室の一人目のお客様ですよ。ようこそ」館長の話 요약すると、会社員時代の経験を活かして、この博物館を大きく変えているのだそうだ。これまでは、興味のある人が自由に入りにできる風通しのいい博物館ではあった。直接の関係者の満足度はかなり高かった。しかし、それは一部のマニアというか、相当のめり込んだ人だけのための施設であつたともいえる。限られた人たちだけの施設になっていたのだ。博物館協会に入っていないかつたのも、博物館の重要な仕事である研究成果の一般市民への開示にはこれまで全く関心がなかったからだ。先ほどのローカル列車の乗客さえほとんど知らなかったことがその証左だろう。これでは市民の博物館としての機能を十分果たしているとはいえない。それに州から与えられる予算だけでは、新たな取り組みはむずかしい。研究に十分な予算を獲得するには自助努力でまかなわなければいけなくなってきた。

そこでシュルツ館長は「全市民、全州民が毎月通いたくなる博

博物館」をキャッチフレーズに、博物館を大改革することにした。その一大エポックとなるのがこの展示室だ。これまでは資料置き場になっていてあくまで自分たちだけのためのスペースだったのを、広く一般来訪者のための空間に大転換したのだ。しかも展示にあたっては、企業での経験から商品を陳列する感覚でまとめたという。一般市民に公開するというより、お客様にお見せする、という表現のほうがぴったり来る。展示品だけでなく、壁や、床、陳列台がトータルでコーディネートされているし、しかも、予算の制約もあって専門業者に発注したのではなく、館員たち自身での作業だったことを示す素人っぽさが、逆に清新な雰囲気を作っていた。

列車の駅から見えた看板も館長の発案だった。ただ周囲の反応があまり芳しくなかったのと、こちらも使えるお金の条件が厳しかったから、ミュージアムとだけ書いた質素そのものの小さな看板になった。しかし、駅に停車した列車からはちゃんと見えるし、私のようにそれに引き付けられて訪れる者が出るのだから、まずは成功ではないだろうか。

一週間がかりなので大改装がようやく終わって関係者は先ほど帰宅したところで、館長が明日からのお披露目を前に各コーナーの最終チェックをしているときに私のチャイムの音が聞こえた、ということだった。私は一人目のお客様というより、最後の閲覧者だったというのが正しいのかもしれない。

全体の三分の一くらい歩いたところで、展示室のレイアウトや展示の流れもわかったから、後は自分のペースで見てみようと思

い、ルイスに伝えた。すると館長は、それは残念、とはいったものの、最初と同じ笑顔の後、そそくさと館長室に入ってしまった。リニューアルオープンの前日ということで、いろいろと雑務があるのだろう。私は自分のペースでゆっくりと見始めた。

一人での見学が始まって一五分くらいたったときだっただろうか、展示室の片隅にあった書類の山の一つに目が留まった。整理のときの片付け忘れか。後でルイスに連絡しておいたほうがいいだろうと思いながら近くに寄ってみた。すると、すっかりくぐられた書類の表紙には紐の合間からドイツ語に混じって古びた漢字らしき文字の一部が見える。中国語だろうか、もしかして日本語か。それにどうしてこのドイツの小都市に。眺めているといつものまにかルイスがそばに立っていた。待ってましたとばかりに説明を始めた。なぜか以前からこの館にあったらしい。あいにくバイエルンの歴史だけでなく、ギリシャ史、ローマ史にまで研究を広めている者はいても、東洋もやってみようという館員は皆無だった。日本語、中国語に堪能な人はいなかったのだ。ただ、東洋の文字が入っていておもしろそうなので、いつか読む人が現れるのを待って、くぐられたままになっていたのだという。いつごろどのような経緯で所蔵するようになったのかは全くわからないとの説明だった。ルイスもたいして気に留めることなくきた、といている。「偶然ですね。何回も確認したはずの新展示室に、こんなほこりだらけの何だかわからない書類が残っていたなんて。そうです。いいことを思いつきました。せっかくの偶然です。開梱しますから解読してみませんか」シュルツ館長は、目を細めて言っ

た。

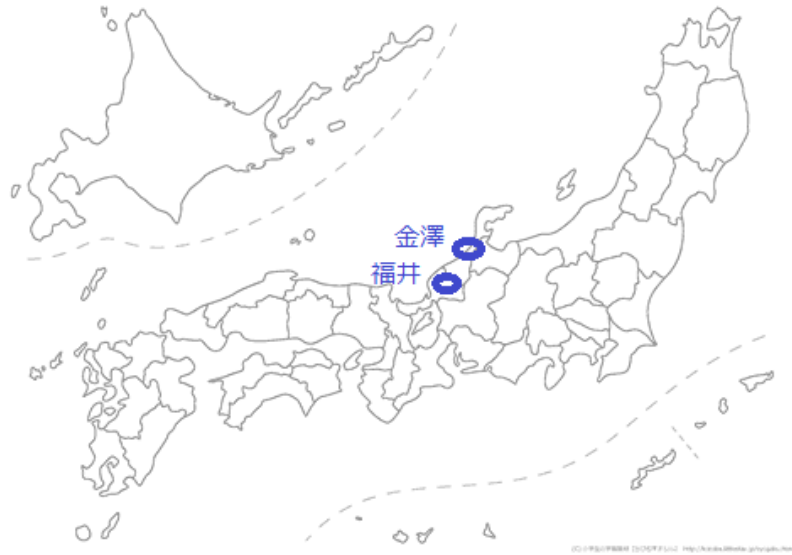
冗談じゃない。日本語かどうかわからないものが読めるか。それに仮に日本語だったとしても、三十数年前に高校の古文の授業で習っただけの知識を、錆びを取りながらひっくり返してみたところで出てくるものはたかが知れてる。いくらのおんぴり旅とはいえ、それは無謀というものだ。精一杯伝えようとしたのに、ルイスは理解できたのかできなかつたのか、そそくさと館長室からはさみを持ってくると、紐を解き始めた。そして、「さあ、やってみてください」といって館長室に戻ってしまった。

一人になった私はしばし呆然となってしまった。できないものはできない。漢字らしき文字が見える紙の山を一枚ずつめくってみたところで何もわからないだろう。予定が詰まっているわけでも、ほかに重要な用事があるわけでもないにしろ、これはムダというものだ。それにいったん始めてしまうと、いくばくかの結果を期待しているであろうルイスにも失礼になる。これは、やはりはっきりと断るべきだ。そうして館長室へ向かおうとしたとき、解いた太い紐の下にあったいねいな文字が目に入った。

加賀金澤、越前福井

想像していた歴史の教科書に出ている達筆の行書体ではなく、ていねいな楷書体なので、はっきりと読める。これなら日本語の部分は読める文字と文字の間を想像を働かせながら、いろいろあてはめていけばおよその内容を知ることにはできるかもしれない。ドイツ語の文章はまずパソコンからネットの翻訳サイトに通してみても、その後はっきりしない部分はルイスの協力をもらえばいいだ

ろう。何より遠く離れた異国の博物館の片隅にずっと放置されていたという古文書に、日本のそれも地元の地名があったのだ。これはもうほっておくことはできない。一、二日かけてみてもいいではないか。全部で数十枚あるうちの数枚でも意味が理解できたら、と思った。ちよつとしたミステリー気分だ。



急いで館長室へ行き、ルイスの申し出に応じる旨伝えた。すると館長は一瞬緊張した表情をしたあと、すぐさっきの笑顔に戻り、「ありがとう。最大限協力するからやってみてください」といって握手を求めてきた。そうだ、こんなおもしろいことにはめったに出会えるものじゃない。推理小説でないほんとうの謎解き、ど

んな展開が待っているのだろうか。推理小説よりもっとおもしろい結末になるかもしれない。ルイスはそれほど深い関心を持っていないように見受けられる。しかし、私はやる。このドイツ語と日本語で書かれた古文書を解説するぞ。

さっそくドイツ語の翻訳サイトに入れてみようとはほこりを丁寧に払いながらドイツ語の文字を拾い始めた。博物館の人たちは見知らぬ東洋文字の入った文書を見て、すぐわからないと感じたのか、その横に並んでいるドイツ語を確認しようとはしていなかったようだ。漢字の部分ははいねいにほこりがとりはらわれているのに、ドイツ語の部分はこの文書の歴史を十分証明する量のほこりが覆っていた。ほこりを払い始めてまもなく、手が止まった。

Ludwig van Beethoven

SYMPHONIE F-Dur

Pastorale

ベートーベンの田園交響曲ではないか。田園交響曲の解説書だろうか。そっと何ページかめくってみる。ドイツ語と日本語が交じりあったスタイルは変わらないものの、途中に楽譜が入っている。こちらは几帳面と思える漢字とは対象的に、ずいぶんラフな感じだ。ラフ、ちよつと待て。この書き方は、いつか見たベートーベンの自筆譜とそっくりではないか、そっくりというより。私は次々ページをめくった。どこも同じだ。これはまぎれもなく。

書類を抱えると館長室へ走りこみ、ルイスに説明を始めた。当然、疑いの目をされた。日本には何の関係もなかったベートーベンが日本語の混じった文を書くはずがない。あたりまえだ。しか



し、読み始めると陽気な館長の表情は真剣になり、文章に集中しだした。沈黙の一〇分の後、ルイスはようやく口を開いた。「これはベートーベンが書いたものだよ。まちがいない」館長も興奮を抑えきれないでいるのがよくわかった。何というめぐり合わせだろう。たまたまホテルのフロントで紹介された博物館の所在地は、ベートーベンの母の生地コブレンツだった。それがきっかけでクラシック音楽のコンサートを楽しみたくなりミュンヘンをめぐっていたら、途中駅でふと見えた看板に引き寄せられて小さな博物館に来てしまった。その博物館の片隅で目にした以前から放置されていた古文書を読んでみたら、ベートーベンその人が書いた日本語交じりの手紙だった。

ここで私のドイツ旅行の残りのスケジュールは決まった。ベートーベンの新発見の手紙、それも日本語の交じった文書の翻訳にすべての時間を当てることにした。もちろん専門機関に持ち込み、そこで翻訳してもらうことも考えられる、いや後になってみるとそういうやり方もあった、と気がついた。しかし、もう夢中でそんなことを考える余裕はなかった。ルイスもすべての時間を翻訳にあてる、と私との共同作業を強く提案してきた。明日からの準備はもう完璧にできているから、という。

第一発見者の義務として、ここからは翻訳した内容の報告をさせていただく。これ以降、私のドイツ旅行報告は全部カットする。もっともこの日からは、毎日早朝から深夜まで博物館にこもっていたので、ほかに書くべきことなどないから、といったほうがいいかもしれない。

日本で田園交響曲として知られているベートーベンの交響曲第六番が完成したのは一八〇八年で、この文書が書かれたのは曲の完成から数年以内と考えられるから、二〇〇年くらい前ということになる。文章を読み進めるにつれ、二〇〇年の時を越えて伝えなければならぬ責務を強く感じだした。

ここで初めにお断りしておかなければいけないことがある。まず、この文書が書かれた一九世紀初頭のヨーロッパ情勢については、博学な館長が私に詳しく説明してくれた。それで文書の時代背景を彼と確認しながら読み込んでいくことができた。初めはあまり関心がないように見受けられたルイスが、いざ始まってみると大変な熱の入れようで、特にベートーベン周辺のこととなると、同じドイツ人ということ割り引いても驚くほど詳しく知っており、時には何かに取りつかれたように語り続けるのに驚かされたのが、一度や二度ではない。しかしである。この小編で報告しなければならぬのは、初めて明らかになったベートーベンの事実である。歴史解説ではないし、読後感を述べることもでも批評することでもない。これまで理解されていたとは全く異なる大作曲家の姿を、一般市民の視線から正確にわかりやすくお伝えするのが与えられた責務だ。

このため、翻訳は平易な現代語で行うこととした。一九世紀初頭といえ、日本では江戸時代だ。しかし「拙者は思ひ候」、とはしなかった。地名や人名だけではなく、手紙の三分の一は、日本語で書かれていた。原文のニュアンスを尊重した上ですべて現代語に直した。漢字も「金澤」を、「金沢」に書き改めた。もつとも、

ベートーベンの多才ぶりには改めて驚かざるを得なかったし、逆に日本人でありながら日本語の部分の理解に四苦八苦して冷や汗をかいたものだ。また、訳出に当たっては、ルイスと手分けして時間の許す限り関連資料を調べ、ネット検索し、正確を期した。後で専門図書館で確認した上で確定した箇所も少なくない。しかし、調べてもごたごたと解説は入れていない。手紙はごく親しい人たちにあてたもので周囲のことがほとんど省略されているので、直訳しただけでは意味が通じない。そこで、正しい理解ができるよう最低限の補足は必要だ。が、脚注や巻末注釈形式では読みづらく、また連続で読めないのも、手紙全体を通しての流れや熱がいつのまにかどこかへ行ってしまい、肝心のベートーベンの事実とそこでの思いを伝えることができなくなってしまう。そこで、あくまでベートーベンの筆致を再現することに最大限注力し、理解を助けるための補足は本文中にそっと入れることにした。このため、やさしい日本語の外見ながら、そこまでにはかなりの時間がかかっている。それでも限られた時間では細部で完全な結論にまで至らなかった部分が残ったのは認めなければならない。とはいえ、これまで行われてきたベートーベン理解を一変させる事實は、まちがいなく報告できているものと確信している。

また、江戸時代、イコール鎖国、イコール孤立、のイメージを持つておられる方は、ネットでもいいから、最近の「鎖国」研究の結果を確認してイメージを修正した上で次に行っていたきたい。江戸時代は外国に固く門戸を閉ざしていた時代、との認識では、今回訳出した手紙は真実とはほど遠いでたらめばかりとし

か見えないだろうから。

なお、ベートーベンではなく、ベートホーフエンが日本語表記では原語に近いこともわかった。全体は一般的な現代語で表現することに努めた中で、主人公の名前だけは全く新しい事実を正確に報告するのにふさわしいように、これまでの習慣とは異なってもより正しいものを使った。一方、ベートホーフエン以外の人名は、方針にもとづいて現代の名前に置き換えた。



パストラール交響曲完成の3年前の

ベートホーフエン

私、ベートホーフエンが作曲した交響曲へ長調、パストラールについて、一番大切な日本の加賀と越前の親友にこれから説明させてもらいたいと思います。

普通、作曲は貴族からの委嘱で始めます。ところが、この交響曲は委嘱を受けていないのに作りました。曲に標題をつけるのはあまり好きではありません。しかし、この曲ではつけましたし、それどころか楽章ごとにも標題を入れました。こんなことは初めてです。それに、四楽章ではなく、五楽章形式という交響曲も他

に例がありません。更に曲の細部に入ると、これまでの私のものとは異なる部分がたくさんあります。すぐ目につくのは、弦楽器の弦を、弓を使わずに指ではじいて音を出すピチカート奏法の部分が多いことです。それに、交響曲の常識であるドラマティックで最高潮に盛り上がる終結にもなっていないません。ほかにもたくさんあります。

当然多くの聴衆や音楽家から聞かれました。そして答えました。おこがまししながら、音楽家ベートホーフエンの名はウィーン初め各地に知られていますから。しかし、その答えは、必ずしも核心ではありませんでした。うそをしやべったのではないにしても、ほんとに言いたかったこととは距離があります。なぜそんなことをしたのか。初演が不評だったからでも、意地の悪い批評家がいだからでもあります。真実は、あなた方のために作った曲だからです。最初の、貴族からの委嘱がなかったのに作った理由はこれです。

幕府に秘密で加賀藩、福井藩からウィーンにやってきているあなたたちのことは、たとえ遠い異国であっても今は公にはできません。あなたたちとの一生忘れないであろう素晴らしい交流が始まったときの約束は決して忘れていません。ですから、あのような表現になりました。しかし、永遠の親友のあなたがた四人だけには、ぜひほんとのことを聞いてもらいたいです。実際、この曲には日本があちこちに入っています。詳しくはこのあとから説明させてもらいます。つまり、この交響曲は私ベートホーフエン一人でできたものではなく、日本の皆さんとの共同制作作品とも

いえるものなのです。この事実はいつかは明らかにならなければなりません。今は無理でも、何十年後、いやもしかしたら一〇〇年後二〇〇年後になるかもしれません。でもそれまではベートーヴェンのこの交響曲は、仮の姿でしかないのです。

あなたたちとの出会い、今でもはっきり覚えています。ハイリゲンシュタットの森をいつものように散歩していると、これまで聞いたことのない音楽が突然飛び込んできました。あつ、また耳の具合が悪くなったのか。そう思いながらしばらく立ち止まっていると、何と魅力的な音楽でしょう。知らず知らずの間に引き込まれてしまいそうになりました。そして、それは決して私の耳のせいではなく、まぎれもなく森の中の小さな家の窓から広がっているのです。私はこれまで聞いたり演奏してきたものとは全く違った音楽に引き寄せられ、気がつくとも音楽が流れてくる家のドアをノックしていました。

音楽が止まり、ほどなくしてドアを開いてくれたのは東洋人の女の人でした。黒い髪と眼の整った顔から発せられた笑顔は、さつきまでの音楽と同じくらい私を魅了しました。私も精一杯の笑顔を、と思ったものの、普段していないことはできませんね。無愛想なままでした。部屋へ招き入れてもらうとほかに男の人が二人と、女の人が一人、合計四人の人が見慣れない楽器を手にしながら同じように笑顔で応じてくれました。服装はこの地方の人と同じであっても、遠い東洋、それも大陸から離れた島国日本から来た人であることはこのときは全くわかるはずもありませんでした。

まずは自己紹介しなければいけません。気のきいたことばなど出てこない私は、名前はベートホーフエン、この付近に住むボン出身の音楽家です。いつものように散歩していたらこれまで聞いたことのない美しい音楽を耳にし、引き寄せられてこの家へ来ました、といました。私が、ベートホーフエンといったところであなたたちの反応があったのは、はつきり覚えていますよ。

次にあなたがたからの紹介がありましたね。女の人にはドアを開けてくれた加賀の金沢出身の宏美さんと越前の福井出身のあい子さん。それから男のひとは、越前福井の邦雄さんと加賀金沢の卓朗さんです。有名な音楽家ベートホーフエンさんにお会いできてうれしいです、と行ってくださいましたね。

普通なら同国人どうしであつてももう少しお互いの紹介を続けるのでしようが、私はすぐさまさつき聞こえた音楽を続けてほしいとお願いしてしまいました。するとあなたたちは、手にしていた私の知らない楽器を持ち直し、そして続けてくれました。私は、驚きとか驚愕ということばは、まさにこのためにあるのだとわかりました。それほど心が揺れ動かされました。箏、能管、鼓、それに太鼓から流れてくる音楽は、ピアノやオーケストラの各楽器が作り出すそれとは、全く別の世界でした。楽器の音や奏法はもちろんのこと、音階やリズムなど音楽の基本的な組み立て方が、こんなやり方があったのか、と思うくらい異なつたものでした。でも不思議なことに、よい作曲とよい演奏は、どんな形式であろうと、どんな奏法であろうと、どちらも深い感動を与えてくれます。あの日は、家に帰っても興奮のあまりほとんど眠られませんが、

でした。

翌日から本格的なお付き合いが始まりました。私は、朝早くにまたあなたたちの家を訪れ、楽器一台ずつの演奏をお願いしました。あなたがたは快く応じてくれました。それぞれの楽器は独特の個性を持ち、合奏のときはまたちがう空間をかもし出していました。次に私もそれらの楽器を手にとって演奏してみたい、と頼もうとしたとき、宏美さんはその前にちよつと話を聞いてもらえませんか、といわれました。そうでした。なぜはるばる東洋の日本から楽器を持ってウイーンへ来ることになったのか、お聞きするのが礼儀でした。そして話は音楽と同じくらい興味深いものになりました。

箏そうを奏そうでる宏美さんは金沢城で食事の用意を担当たくわんされているのでしたね。そして、仕事の合間に金沢城玉泉院丸ぎょくせんいんまるの庭園で城内外の同好の人たちと合奏を楽しまれているとのことでした。私は、きつと金沢城内やその周辺の多くの人たちは、私がそうであったように、宏美さんたちが奏でる演奏にいつも聞きほれていたと思います。時には藩主もいらっしゃった、ということでしたね。宏美さんにウイーン行きの声がかかったのもこれが縁だったのかと思います。それに、私はもっと多くの人々が聞いていたと思います。玉泉院丸は金沢城内とはいっても市中に近く、日本の木造建築は音を通しやすいということなので、金沢城下のたくさんの人々は宏美さんたちの曲が始まるのを毎日心待ちにしていたことでしょう。



金沢 玉泉院丸庭園



【庭園全景 3(休憩室和室より)】(石川県)



【ライトアップテーマ「さくら」】(石川県)

能管担当のあい子さんは、福井の藩校で勉強中、ではなくて事務の手伝いに来ていて、事務所のとりにある教室の授業が毎日聞こえるのでしたね。入校できるのは男子だけという規則になっていたので、勉強にかけるあい子さんの熱意に応えるために藩が特別に取り計らってくれた、と聞きました。熱意とともに、さわやかな笑顔に藩校の校長先生も許可することにしたのではないでしょうか。そして、ときどき福井藩主の別邸養浩館ようこうかんの屋敷で同好の人たちで演奏を楽しんでいたんですね。こちらも福井城近くの市中にありますから、福井藩主初め藩の主だった人たちは何回となく耳にしたでしょうし、近くの住民は皆楽しみをしていた

ことだろうと思います。

鼓<sup>つづみ</sup>の達人邦雄さんは、お医者さんです。あい子さんによると、福井では知らない者はいないくらいの名医とのことでしたね。私もそんな感じがします。ちなみに、私の演奏会にいつも来てくれる人の中にも医者がたくさんいます。どこの国でも何か職業で共通するものがあるのでしょうか。そして邦雄さんは忙しい合間をぬって養浩館での演奏に参加していたのでした。邦雄さんの演奏を聞かせてもらう機会は何度となくありました。また、話し合いの場面も数多かったです。そのたびごとに私は専門家顔負けの演奏技術、演奏に対する真摯な姿勢に深い感銘を受けました。医者という多忙な職業をこなしながらこの域にまでというのには脱帽せざるを得ません。先ほど書いた私の演奏会に来てくださるお医者さんたちはもっぱら聞くほうで、演奏も、という人はほとんどいません。また医学の面から、四人の中でもヨーロッパへの関心が一番高かったともうかがいました。

福井 養浩館庭園



【秋の養浩館庭園(5)】(福井市、クリエイティブコモンズ 2.1 日本ライセンス)



【福井県 養浩館庭園】(経済産業省、クリエイティブコモンズライセンス表示 4.0 国際)

太鼓なら何でも、の卓朗<sup>たいこ</sup>さんは、加賀藩の藩校一回生だったの  
でしたよね。楽器は近所の師匠に習っていたのが、上達ぶりが目  
覚しく、藩校一回生ながら宏美さんたちの玉泉院丸での合奏に参  
加しているのです。若いエネルギーがあふれる演奏は聴く者に  
も力を与えてくれます。同時に合奏のときのほかのメンバーとの  
呼吸合わせは実に細やかで驚かされました。それに他の楽器にも  
挑戦中で、これからますます楽しみです。

江戸に幕府ができてから二〇〇年近く続いている安定した日々  
の中、それに安住してしまうことを恐れた人たちは、国外の動向  
に目を向け、また外国との貿易で藩の発展をめざしました。幕府  
も実は同じで、表面上は外国との交易を制限してはいたものの、  
現実にはそれほど厳しくなくて、むしろその活動から得られる情

報や物品に大きな関心を寄せていたと聞きました。

とはいえ、加賀藩と福井藩が打ち出した器楽での外国との交流は、藩の誰をも驚かせたことは容易に想像できます。あなた方四人も話があったとき、全く理解できなかったというふうなことでした。それに幕府の耳に入れば、外国渡航にはそれほど神経質ではなくてもチェックされます。何かよからぬことを企てたとみなされるかもしれません。

しかし、玉泉院丸庭園、養浩館からの音色に毎日接していた藩首脳たちは少しもひるむことなく水面下で清々と準備を進めました。互いを知り、認め合う最良の方法だとわかっていたからでした。そしてあなた方四人が選ばれ、長旅の末、ここウィーンのハイリゲンシュタットへたどり着いたのでした。新居がみつきりさつそく合奏を始めたところを私が通りかかった。こんないきさつでしたよね。

では、さつそく曲のくわしい説明を始めることにしましょう。まずは第一楽章の冒頭からです。「田舎に着いたときの愉快的感情の目覚め」、つまり早春の理想郷を日本の囃子はやしの一フレーズに凝縮しました。最初の四小節です。ずっと求めてきた地へ着いた喜びと心の高ぶりを表現しました。



ここは私がこの交響曲を書いたハイリゲンシュタットのグリツインガーシュトラークではなく、あなた方が長年暮らしてきた金

沢や福井そのものでもない音楽宇宙の世界です。だから囃子をそのまま使ったのではありません。日本の囃子にはないスラーを使い、それと囃子本来の姿を表現するためのスタッカートを組み合わせました。

スラーで、到着の安堵を私のこれまで経験してきた音楽で表現しました。一方スタッカートでは、まだ見ぬ世界に対する緊張をあなたが慣れ親しんできた囃子本来のイメージで表すことができましたと思います。ほんとなら能管のうかん、小鼓こつづみ、大鼓おおつづみ、そして太鼓たいこ、つまり能の四拍子しびょうしをオーケストラに入れて、この交響曲を始めたかったのです。ヨーロッパ音楽のリズム周期をいう4拍子よんびょうしじゃないですよ。でも残念ながら、今は許されないことですね。そこで四拍子しびょうしを頭において、それを今のオーケストラが持っている楽器と音楽技法を使って、四拍子しびょうしと同じ、いや、二つが融合したまさに新しい理想の音楽をめざしたつもりです。

でも、一般のウイーンの人が突然異次元世界に入ったらどまどいがあるでしょうから、冒頭から一三八小節目までの提示部は二回繰り返して演奏することにしました。記憶や理解を定着するには繰り返しが大切です。



この主題は、この後も少しずつ形を変えながら何回も登場させました。一五一小節目からの展開部ではこの主題を何回も何回も繰り返します。改めて数えてみたら、なんと六五回ありました。やがて日本にもこの交響曲が正式に紹介されるときがくるかもし

れません。そうしたら、この部分から私の説明がなくても、日本音楽とのつながりに気付く人が出てくるでしょうね。六五回の繰り返しは、聴衆に理想郷のイメージを定着させると同時に、私から未来の日本人へのメッセージでもあるのですよ。

それを決定付けているのが、六五回の繰り返しの中で二回出てくるファゴットとバイオリンのかけあいです。囃子で聞きなれたかけあいそのものです。



ここまで来ると、未来の日本人のかなりの人は、「おや、これは」となるでしょうね。いったい、誰が、いつ、最初に気付いてくれるでしょうか。楽しみです。

第一楽章は、標題のとおり聴衆をこれまでとは全く違う世界へいざなうことに集中しました。理想郷は、素朴で静かに悠久のときが流れています。この楽章には全体を通して、普通なら必ずある大きく盛り上がる部分がありません。これこそ、理想郷の最初のイメージなのです。

曲の標題も、実は苦渋の選択でした。あなたがたから教えてもらった金沢、福井の風景、暮らし。この心に最も近いものとして選んだものの、一般聴衆には前世紀に流行したパストラールと同列に扱われてしまいました。牧歌のような自然描写だけの音楽と

思われてしまったのです。同じ名前なので混同されないように、わざわざ「音画よりも感情の表現」と補足を入れましたし、そもそも私の交響曲はこれまでも精神世界を描いてきたのを、今回は従来のパストラーレの上により高い次元で昇華したつもりです。それは情景表現ではなく、私が追い求めてきた普遍性を見つけたところなのです。理想郷の具体的なイメージに近い日本の農村風景、そこには米を栽培している田、稲田が広がっています。でも、田があるから理想郷ではありませんよね。日本に正式に紹介されるときはどんなふうに訳されるでしょうか。

日本の器楽合奏は知れば知るほど興味がわいてくるものでした。日本では大人数の合奏でも指揮者がいないというのにまず驚かされました。確かにウイーンでも数人の室内楽では指揮者はいません。そのかわりお互いの顔が見えるように並んで、表情やアイコンタクトで強弱やタイミングを合わせています。ところが、あなた方は一直線上に横並びします。演奏中はまっすぐ前を向いていて隣の人に目をやることは絶対にありません。表情も全くといていいほど変わりません。これが最初は不思議でしかたがありませんでした。

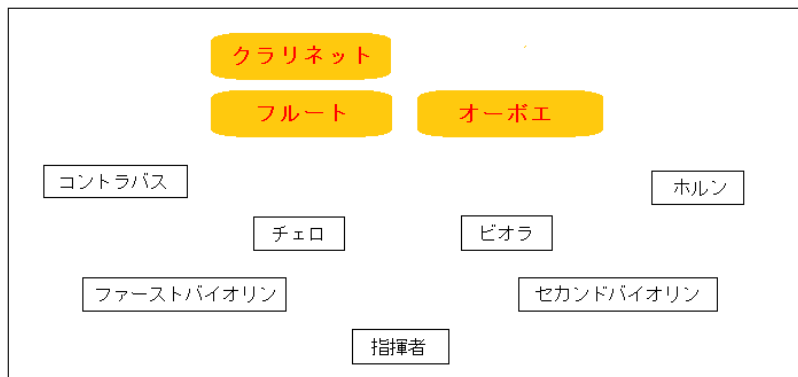
その後ピアノや、ボンにいたときに弾いていたバイオリン、ビオラを持ち込んでいっしょに演奏させてもらっているうちに、だんだんわかってきました。他の人をしっかり聞き、また呼吸を感じながら演奏しているのですね。表面に出るサインはないかわり、瞬間の音でしっかり次の音の性格を共有しながら進んでいるので

した。

さて、第二楽章に移ります。「小川のほとりの情景」では第一章の早春から本格的な春の訪れです。まず全体の構成で目立つのは、チェロを二人のソロチェロとそれ以外というように二つに分けたことです。ソロチェロは主にバイオリンと同じような主旋律を担当していて、小川が川面だけでなく川底まですべてが春を届けているさまを表現できるようにしました。でももっと重要なのは、二人のソロチェロ以外のチェロとコントラバスなんです。ピチカートが続けて小川とその周りの自然全体がしっかりと生命の躍動の季節を動かしています。そして、実はここは華やかさと安心感が得られる箏での演奏をイメージしていました。ほかにも弦楽器のピチカート演奏の部分がたくさんあります。その比率は、これまで手がけた交響曲と比べると格段に高くなっています。この理由は、箏や鼓を考えているからなのです。具体的な場所はいちいち説明しなくても曲の流れですぐわかるでしょうね。

二つ目は、最後に近い一二九小節目からのサヨナキドリ、ウズラ、そしてカッコウの声のところですが。ここは歌舞伎の小道具方を考えて書きました。小川のほとりから聞こえる森の深い奥からの響きを、舞台裏からの音で表現してみたかったです。これに近い効果が出るよう、オーケストラ内では奥にいるフルートとオーボエ、クラリネットをそれぞれ当てました。





Pastorale交響曲第2楽章のステージ



歌舞伎の舞台

三つ目、これが一番大切な部分です。九一小節目から四小節目は大注目してください。小川を離れて、近くの森の入り口に立ったとき、私の頭に素直に現れた森の生命の声です。すべての楽器が登場していろいろなメロディを奏でます。主旋律というようなのは存在しません。でもこれこそが、あちこちにあふれる生命のいぶきそのものなのです。大自然の摂理なのです。

普遍的な原理だと思います。イエスとノー、支配と服従、秩序と混沌といったこれまでの二元的捉えかたではなく、多数の共存を認める世界こそ私たちがめざすものです。たぶん日本、あるいは東洋ではこの世界がすでに存在しているように感じています。あなたがたとの音楽を通してのすばらしい交流がそれを証明してくれました。そして、その集大成がこの交響曲、中でもこの四小節目がそれを具体的に表現しています。

今回の交響曲には随所に日本の音楽の要素を取り入れました。しかし、組み込んだのは、個々のパーツだけではありません。あなたたちと共有した新しい世界そのものなのです。ここオーストリアの人々にどれほど理解されるかはわかりません。でも、それこそ一〇〇年後、二〇〇年後には、世界中に受け入れられる日が必ず来ると断言したいと思います。

ヨーロッパでは戦争が絶えません。私がまだボンにいた時にパリでおきたバスチューユ監獄の襲撃以来、国と国、同国人どおし、と原因や内容はさまざまながら、ヨーロッパで戦いがなかった年はないくらいです。あなたたちがウイーンに到着する数ヶ月前には、ナポレオン軍のウイーン侵攻があり、ウイーン市内は騒然と

なりました。そのおかげで、精魂込めて作ったオペラ、レオノーレの公演は三日間だけで終わってしまいました。それから四年後には、またボナパルトの軍隊がウィーンに攻め込んだのはみなさんもご存知のとおりです。

政治のことはわかりません。でも、音楽家としてできることはないかと考えました。その答えの一つがこの交響曲です。しよせん夢物語といわれてもかまいません。平和の世界を高く掲げ、一人でも多くの人に聞いてもらえるようにずっと努めるつもりです。そこにはあなたたちとの交流で教えてもらったことがたくさん含まれています。

思い出は尽きません。あれはお互いの交流が始まって一ヶ月がたとうとしているときでした。あなたたちの家に向かって慣れた道を歩いていると、最初のとくと同じように素敵な曲が聞こえてきました。ただこれまでのとはちよつと違つて、軽くにぎやかです。そして、ドアを開けると皆さん日本の着物姿に鉢巻を巻いて踊りながら音楽を奏でて迎えてくれました。こんな素敵な歓迎は、ほんとに初めてです。次の第三楽章には少なからずこのときの印象が入っていると思います。

さらにもつと驚きの出迎えがありました。今度は、みなさんの家に近づいてきたのに何も聞こえません。さらに近づいてみると窓に人影もないようです。おや、何か用事ができてみんな外出中なのか。そう思いながらも家の前まで行き、一応ドアをノックしようとする、突然ドアが開きピアノとバイオリン、ビオラ、そ

れに箏での大合奏が始まりました。確かに、私も演奏に参加させてもらうために私のピアノとバイオリン、ビオラをあなたがたの家へ置かせてもらいました。でも知らないうちにそれを完璧といっているほどにマスターしてしまおうとは。一番若い卓朗さんはひよっとしたら、と思ったことはありません。ところが、卓朗さんだけでなく、宏美さん、あい子さん、邦雄さん全員が習得してしまいました。ひよっとして、と思っていた卓朗さんはピアノ、バイオリン、ビオラのすべて弾きこなせるようになりましたね。

私も負けず嫌いなほうですから、その日から日本の楽器の猛特訓を寝る間も惜しんで毎日続け、短時間で上達したのは皆さんご存知のとおりです。ほんとに夜中まで練習したのですよ。おかげで近所から苦情が来て引越さなければならなくなりました。近所の人はもう少し我慢したら毎日全く新しい音楽を楽しむことができるようになったのに残念なことをしました。猛特訓といえれば日本語にも一生懸命取り組みました。この手紙、ご覧のとおりあちこちに日本語が入っているのがその成果です。

ウイーン市内を案内させてもらったのも楽しい思い出です。王宮やシュテファン大聖堂など定番のコースを一通りめぐった後、ぜひベートホーフエンならではのところを、となりました。有名ではないけれど地元ではけっこう人気のある場所や気のきいた店、といったものにはあまり縁がない私は、これまで住んだことのあるウイーン市内の部屋を一軒ずつ案内して回りました。ほとんど毎年とっていいほど引越していますから、あのとときでも二〇箇所近くありました。かつて住んだ家の前に立ってみると、その

ときの思い出がよみがえってきます。頼まれもしないのにしゃべり続けてしまいました。興味深く聞き、また質問してくれたことに感謝です。耳の調子が悪くなりだしてから人との会話はめっきり減っていたので、ほんとに久しぶりでした。結局二日かかりの案内になりましたね。翌日、私は疲労どころか、体全体が軽やかになったのを感じました。これまで頭の中につまっていたものがきれいに抜け出たように思いました。

何度となくみなさんとハイリゲンシュタットの森を散策したこともよみがえってきます。それまでも私一人でよく散策しました。歩きながら新しい曲のイメージを探り、固めるのにとてもよい場所でした。シュライバー川沿いは、特に気に入っていました。でもその慣れた同じ道でも、あなた方といっしょだと全くちがうものに見えてきました。それに、玉泉院丸庭園や養浩館での演奏会の様子、城下での毎日の暮らし、家族や兄弟のことを、森や川を眺めながら聞くと、なぜか家の中で聞くのとは違って頭ではなくて心にすっ、と入ってくるのです。私もボンでは貧乏なときがあったことなど、これまで他人にはしゃべったことのなかったことまで、つい話してしまいました。話したあと、しまったとは思いませんでした。逆に楽になりました。それにシュライバー川沿いの道は狭いので、五人いっしょに並んで歩くことはできません。二人がやっどです。あなた方は順に私の横に来てくれました。それぞれ話はずみしました。ここで白状すると、宏美さん、あい子さんと歩いているとき、独身の私は恋人とのデートの気分でした。ずいぶん緊張しましたよ。季節によっていろいろな表情を見せる

ハイリゲンシュタットの森、その中であなたたちの語りあい、私の心をどれだけなぐさめ、元気をさずけてくれたことでしょうか。

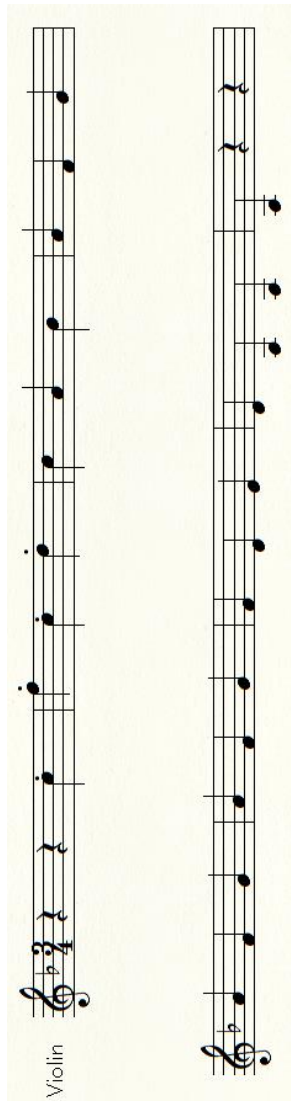
このような日々のおかげで、私の作曲活動は大いに進みました。皆さんとの合奏の時間、私一人での日本の楽器の練習時間ができて、作曲に当てられる時間はこれまでより減っているのに、効率がはるかに上がったので、どんどん満足すべき作品ができてきます。自分でも驚くほどです。耳が聞こえにくくなってきて、一時は作曲どころか生きていることそのものに絶望していたのを何とか乗り切ったところでの出会いだったのです。たとえば、この交響曲第六番を作った年には、ほかに交響曲第五番、ピアノ協奏曲第四番、合唱幻想曲という大曲を次々に完成させることができ、まとめて初演しました。もし後世に私の作曲家人生を整理してくれる人が現れたとき、この年はどうしてこんなに進んだのか頭を悩ますことになるでしょう。まさか、日本からの友達ができて、などとは思ってもよらないでしょうから。

もう一つだけ。お互いに楽器やその奏法を教え学びあう中で、記譜法の話になったことがありますね。私は日本の記譜法には最初は戸惑いました。それもみなさんとの合奏の回数を経るごとに自然に身についていきました。一方、あなたがたに五線譜について説明すると、すぐ理解してくれ、これは便利だといってもらえました。さっそく五線譜に考えついた曲を書きとめていましたよね。

それぞれの歴史やこれまでの使われ方が違うのですから簡単に

比較することはできません。ただ、曲の記録のしやすさ、わかりやすさ、ということだけに話を限定すると五線譜のほうが使い勝手がいいような感じがしています。これから音楽は一部の貴族だけのものから、多くの市民に受け入れられ愛されるものになっていくでしょう。そのとき、誰にも書きやすい、読みやすい記譜法が求められるようになるような気がします。私の誤解でしたらすみません。

第三楽章に移ります。「田舎の人々の楽しい集い」の季節は夏です。あちこちで村祭りたけなわです。先ほど書きましたように、ここでも欲張って日本のスタイルを入れました。最初の出だしの八小節は、能の地謡じうたいを弦楽器のスタッカートの下行型ユニゾンで表現しました。



対して続く八小節は、対照的にドルチェで優雅に流れていきます。祭り会場に少しずつ人が集まりだしたところです。といっても、まだわずか。音楽もピアノシモでそつと奏でます。この計一六小節を繰り返しているうちに会場には大勢の人が集まります。表現する音楽もフォルテシモになります。九一小節目から村祭りの始まりです。村長さんがあいさつします。とあいさつが終わるか終わらないうちに、もう歌自慢、楽器自慢の連中があちこちか

ら出てきます。ソロあり、合奏・合唱あり、踊りあり。お酒も回ってきて、まさに何でもありでイベントは最高潮に達します。まあ、ウイーンであろうが、金沢、福井であろうが、こんなところはあまり変わらないみたいですね。

とそのとき、空模様が急に変わり、どんちゃん騒ぎが止まります。途切れることなく第四楽章に続きます。

第四楽章は、「雷雨、嵐」にしてあります。ウイーンには夕立がないからです。

書いたのは、まぎれもなく夕立です。急に空が暗くなったかと思うと、たたきつける雨、そして雷。村祭りに来ていた人たちからはキヤー、という悲鳴で頭を押さえながら慌てて木の陰に隠れます。しかし、一時間も続くわけではありません。雨がさつとやんだかと思うと、西の空からは陽がさしてきます。静寂の空間が現れます。

嵐というのに少しあっけない感じだったのか、残念ながらウイーンの聴衆の反応はイマイチでした。一日も早く夕立がある気候が理解される日が来ることを祈るばかりです。夕立のために一章追加して、前例のない全部で五楽章の交響曲になったのですから。

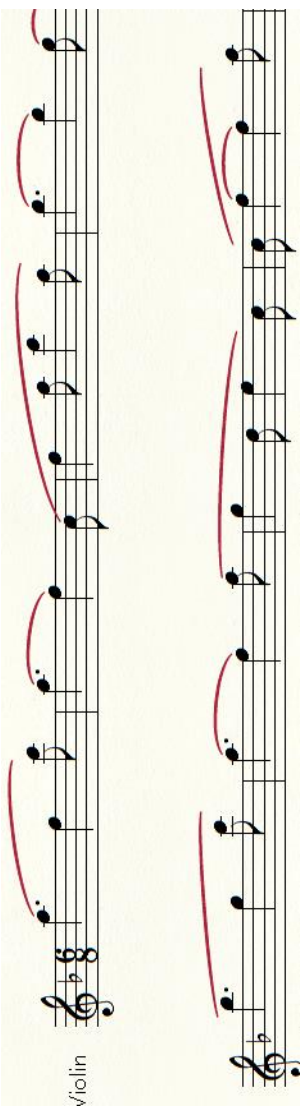
第五楽章は、「牧歌、嵐の後の喜ばしく感謝の気持ち」としました。この交響曲の結論です。最初の八小節が結論一です。無です。何も聞こえませんし、かたちも時間もありません。夕立のあとの澄んだ空のもと、ビオラのドローンは完全に止まった時間で、そこでクラリネットからホルンに続く牧歌は、遠くの風景でしかあ



りません。ウイーンの人々にどれだけ受け入れられるか。今は難しいでしょう。でも、いつかほんとの理解がきつと得られることを信じて書きました。

続く九小節目からのバイオリンのメロディは表題のとおり感謝、それも偉大な自然への感謝、畏敬です。結論二です。印象付けられるよう、この楽章ではさまざまな変奏を加えながら、またいろいろな楽器に渡されながら何回も何回も出しました。

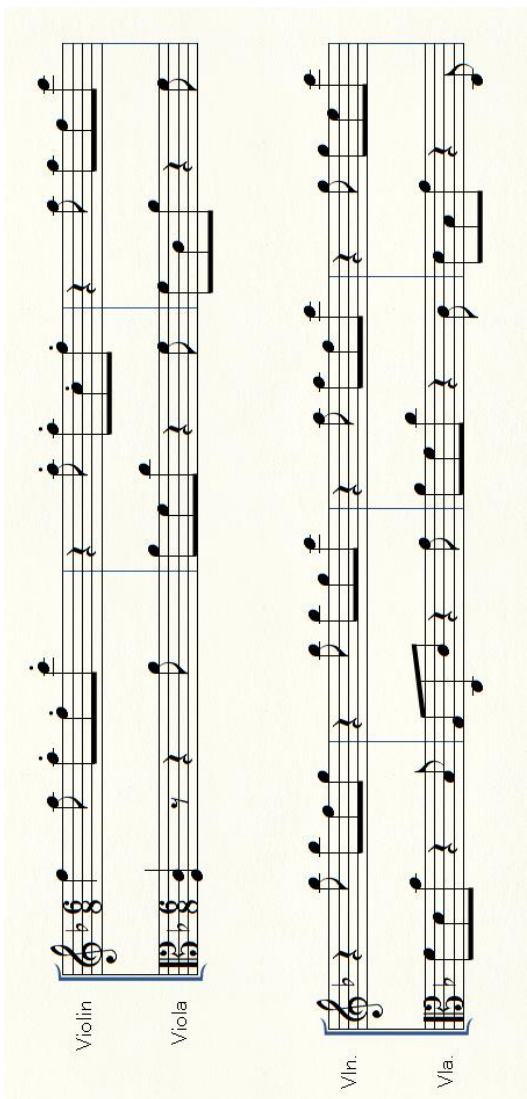
Pastoraleという標題が日本語に訳されるときも、ここをよく反映したことになることを祈るばかりです。



三番目のポイントは一二五小節目から七小節目です。バイオリンとビオラのかけあいです。でも、私の頭にあるのはこれまでのオーケストラと日本の楽器の壮大な対話なのです。楽譜でバイオリンの部分は、バイオリンだけでなくフルート、クラリネットなどが入り、楽譜のビオラのところは、箏そうに加えて能管のうかん、小鼓こつづみ、大鼓おおつづみが演奏します。ビオラをピチカート演奏の指定にしたのはこのためです。前に書きましたように、この交響曲で多いピチカートのかなりの部分は、日本の楽器を使ったかった場所です。特に、ここは第二楽章でありましたように、二元対立から多元的共存の世界への展開の具体的表現なのです。

ビオラは、箏、能管、小鼓、大鼓での重層的多元的共存を訴え

るため、ピチカートを思い切り響かせます。これがこの交響曲の三番目の、そして最後の結論です。



The image displays two systems of musical notation for Violin and Viola. The first system shows the Violin (Violin) and Viola (Viola) parts. The second system shows the Violin (Vln.) and Viola (Via.) parts. The notation includes notes, rests, and dynamic markings such as 'f' and 'p'.

みなさんとの思い出は一生忘れません。教えてもらった日本の音楽とその基礎となっている世界を、ウイーンはじめヨーロッパ各地へ広げていきます。皆さんが日本からはる来てもらったことが大きな成果になるような作品に取り組んでいきます。ほととの作曲家なら、いちいち説明を加えなくても聴衆に正しく理解されるような曲を作らなければいけませんからね。

日本までの長い道中、どうかお気をつけて、そして日本での一層のご活躍を。さようなら。

以上が、ベートホーフエンの手紙である。ルイスと私は、一行読むごとに驚きと興奮で心臓が高鳴るのを感じながら、それを押さえて正確に訳出していった。これまでのベーターベン像、田園交響曲解釈をその呼称から大きく変えることを迫る資料であることは疑いの余地がない。資料の価値を保証するため、あくまで忠実な現代日本語訳にすることに努めた。私たちの想像や意見は一

切ないことを強調しておきたい。

残るのは、ベートホーフエンが数年をともにした日本人たちにあてたこの手紙は、その日本人たちに読まれたのだろうか、ということである。ここからは推定の話になることをお断りした上で進めさせていただく。ただし、ベートホーフエンの手紙を一〇日間にわたってまさに隅から隅まで読み返した二人の結論であることは付言しておきたい。

有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」は、死後に一時期住んでいたハイリゲンシュタットの部屋で発見された。弟のカルルとヨハン宛てになってはいても実際には送られていない。また、それ以上に有名な「不滅の恋人への手紙」は死去したウィーン市内の住居で見つかった。誰宛なのかという論争はともかく、投函されずにベートホーフエンの自宅にあったことは事実である。これらからすると、せっかく書いた手紙が日本人たちには届かなかつた可能性がある。ベートホーフエン個人の思い出日記に終わったことが考えられる。

ルイスと私が出した答えは、まちがいはなく届いた、であった。ベートホーフエンは、おびただしい量の手紙を、家族や知人に出している。それらは、ちゃんと相手に届いている。一方、ハイリゲンシュタットの遺書や不滅の恋人への手紙は、手紙の形式にはなっているものの、その内容は自己葛藤、あるいは書きながらの自身での切り替えであって、相手に伝えるものではない。その点、今回の手紙は、明らかに、というより絶対に伝えることが目的である。どんなことがあっても渡さなければならぬ。直接手渡し

て、曲の説明の部分は口頭で説明を加えたとしても不思議ではない。それに、最初は二〇〇年前の手紙ということで気にしていなかったのだが、他の二〇〇年前くらい前の文献と比べてみると、明らかに手垢やページを繰り返した跡が目立ち、何回も読まれたにちがいないと思われる。書いた本人しか読んでいないならこうにはならない。館長は、一目でわかる。あれこれ調べる必要などないよ。といった。ところどころに見えるしみは、二〇〇年の間に自然にできたものというより、この手紙を読んだ宏美やあい子が思わず涙したのではないか、とまでいった。そういうわれてみると、比較した文献にもしみは見られるものの、こちらほど多くない。それに、ベートホーフエンが日本人との思い出を語ったページに特にしみが集中している。ベートホーフエンの手紙はまちがいなく邦雄や卓朗に渡り、何度も何度も涙しながら読まれた。私のドイツでの最終日に、ルイス・シュルツと私はこれを確認して固い握手を交わした。

その次には、宏美たちに渡った手紙がなぜドイツで発見されたかという疑問が出てくる。しかし、ここからは今は調べようがない。時間がない。ルイスとはメルアドを交換して、何か気がついたら連絡しあおうとって帰国した。

なお、手紙は専門機関での鑑定を受けることになった。紙とインクから年代鑑定をするそう。鑑定と並行してドイツ語版と英語版の作成が始まり、約一ヶ月後に日本語版、ドイツ語版と英語版でマスコミ同時発表ということになる。ただし、発表ではシュルツ館長と私の名前は出さないことを条件にしてもらった。

休暇が終わり日本に戻ると、それまでと同じ毎日が始まった。正確には始まる前に一件あった。休暇中のメールチェック連絡を完全に忘れていたことに、入社して気付いた。休暇取得の条件になっていたのは事実で、これはいかにもまずい。観念して上司のところへ行くと、「ハイジャック事件たいへんだったねえ。無事でほんとによかった」とのことばだった。寛大な上司に感謝しなければいけない、と思ったら続けて「ドイツでの毎日はパソコンに詳細に記録してあるんだったね、少しでいいから見せてくれないか」となった。確かにパソコンにはたくさん入れた。念のためバックアップも取った。しかし、それはベートホーフエンの手紙の部分だ。手紙に関する資料を入れていくにつれてパソコンのディスク容量が足りなってきたので、空港でネットからダウンロードした情報やフランクフルト、コブレンツの資料、メモは消してしまった。だからベートホーフエンの手紙とそれに関する事しかパソコンには残っていない。それに公開される一ヶ月後までは表に出してはいけないし、公開のときもルイスと私の名前は出さないことになっていて。しかたなく一部を見せたが「よくわからないなあ、旅行記には見えないが」と返されただけだった。タイミングよく電話がかかってきて、上司はその対応をしなくてはならなくなったので、何とか無罪放免にしてもらえた。

ドイツへ行く前の毎日に帰っても、ドイツでの強烈な二週間が忘却されるわけではない。帰国後もルイスとは毎日のように連絡を取り合った。時差の関係で、すぐにはいかないまでも、メー

ルすると翌日にはちゃんと返事が来ている。こちらも毎日メールチェックし、すぐ返信した。

リニューアルした展示場は好評のようで、連日多くの入館者があるという。うわさを聞きつけた地元のマスコミからの取材も何件かあったそうだ。毎日忙しくてね。企業勤めの時以上だよ、と嘆いていた。が、ベートホーフエンの手紙と格闘した一〇日間と比べると、ずっと楽だけどね、と付け加えてあった。また、日本に戻ってもそんなに気になるのなら、思い切ってドイツへ来ないか、とも書いてくれたときがあった。あなたの持っている技術士資格はドイツの産業界でも十分活かすことができると思う。そして空いた時間はこの博物館へ来て研究ができる。私といっしょにやらないか。それに、メールじゃなくて直接話したいことがたくさんあるから。何ならこの博物館に転職しないか。そうすれば十分な時間が取れるよ。ルイスの厚意には素直に感謝したい。また、そんな生活に興味がないわけでもない。しかし、同時に日本での仕事にも責任といくばくかのプライドがある。三〇年勤めてきたからには、最後の定年まで責務を全うしたいと考えている。ルイスには機が熟してきたら、とメール返信し、今回は見送らせてもらった。

そんなこんなで帰国して二週間が過ぎようとしていた日、帰国間際のルイスとの会話にあった、宏美たちに渡った手紙はなぜドイツで発見されたかに、ふと思いがめぐった。私が宏美だったら、邦雄だったら、と考えてみた。こんなストーリーに行き着いた。

ベートホーフエンが作曲したパストラール交響曲はこれからヨ

ヨーロッパ各地で演奏されるようになるだろう。そのすばらしさはすでに万人の認めるところだから。でも作曲者自身の意図が正確に伝わらなければ、やはり正当な理解は得られないし、片手落ちだ。私たちだけがベートホーフエンの気持ちを理解しただけでは、ヨーロッパの聴衆には何も伝わらない。かといってこの手紙を公開することはできない。しかし、このままでは永久にベートホーフエンの作曲意図はわからないままになってしまおう。

そうだ。この手紙を筆写して筆写したものを日本に持ち帰ろう。原本はベートホーフエンと同じくらい深い友情と信頼ができたあの人に託そう。そして何十年後か、一〇〇年後、二〇〇年後になるかもしれない適切な日に公開してもらおう。もし一〇〇年後、二〇〇年後ともなればあの家では何世代にもわたって伝え続けなければいけない。そんなことがほんとにできるか、また、できたとしても、世の中が混乱すれば、古文書の保管どころではなくなってしまう。でもこれが考えられる唯一の方法だ。信じてやってみよう。

このストーリーを試しに館長にメールしてみた。めずらしく翌日の返事がなく、三日後になった。ルイスは返事が遅れたことを一言詫びたあと、ストーリーとしては考えられなくはないし、否定する材料もないけどね、となっていた。いつもなら、あれこれと饒舌に書いてくるのに、短くそっけないものだった。今回ののはかなり考えた上だったので意外に思った。しかし、いろいろ忙しいらしいし、そうでなくても気乗りしない日もあるだろうから、  
と思い、さらに意見を求めるようなことはしなかった。

一方、いったん始まった推測は一人でどんどん歩きだしていった。ベートホーフエンの手紙は信頼できる人に託され、そして何代にも渡って大事に保管されてきた。として、それがどのようにして二〇〇年後にシュルツ館長の博物館にあったのか。それに、あるとき私が山積みになされた書類の山から偶然見つけなかったら、日本語がわかる人、日本語に興味がある人がいない博物館では、保管庫の奥に埋もれているだけになっていただろう。それどころかショールームのようにリニューアルした展示室のおかげで、保管庫はかなり狭くなってしまった。置き場が足りなくなつて処分したのもあつたと聞いた。置いてあるだけでいつ誰が入手したのかわからないし、誰も見ない資料は廃棄されてしまう可能性だつてある。もし、私が偶然見つけなかったら。ところが偶然、というところで引っかけかりだした。私がシュルツ館長の博物館を訪れたのは偶然とはいえ、その翌日からのお披露目を前にきれいに片付けられ、何回もチェックされた展示室に偶然、展示予定のない多くの資料の一つに過ぎないベートホーフエンの手紙がほこりをかぶつたまま放置されていた。そして、私は見学の途中で、偶然それを眼にした。そのとき、また偶然にも館長室で執務していたルイスが展示室に戻ってきていて、私が手紙の束を眺めていると展示予定のないものの説明を始めた。重ねて、偶然思い出して、翻訳を提案してきた。それに。

私は、ルイスにメールしようとパソコンを開いた。すると、一時間前にルイスからのメールが入っていた。お互いメールは夜にするのが習慣で、日本とドイツの時差は八時間ある。このため私



のメールをルイスが読むのは八時間後で、ルイスのメールは私は一六時間後に読むのがいつものパターンだ。今日は土曜日だからルイスが午前一時にメールしてもそれほど驚くにはあたらないかもしれないが。

メールのサイズがいつもの三倍近くある。何だろうか。さっそく開いてみた。一五分後、読み終えた私はパソコンから目を上げるとしばらくぼんやりとしてしまった。声も出ず、何をしていいかわからなくなっていた。そしてようやく気がついたのは、私が次にやるべきは、ルイスのメールをここに正確に伝えることだということだった。

ベートホーフエンの手紙が発見されるまでのいきさつ、いろいろと推測してくれてありがとう。今日はこのことについて、少し話をさせてもらいたい。

発見は、私も偶然が重なったからだと思う。そこで、その偶然の重なりを少し思い出してみよう。

まず君の博物館訪問、そして私との出会いは全くの偶然だった。ローカル列車が停車したときに見えた看板で、博物館かどうかもわからないまま来てくれた。これは奇跡と断言していいようなできごとだ。

さて、博物館に入った君は例の書類を発見し、通りかかった私は、ドイツ語と日本語が混在した手紙の翻訳を思いつき、提案した。ここで君にいつか話さなければ、と思っていたことがある。そのためにあのときのことをもう一度細かく再現してみよう。

君は、受付に張ってあった案内に従ってベルを押しした。実はあのときからこっちには見えていたんだ。展示室を一般市民の来館用に改装するということは、これから不特定多数の人が来ることになるのでセキュリティ対策はかなり強化した。館の内外に数十台の防犯カメラを設置したんだ。地元マスコミを通じて週末オープンと広報してあったのに、その前日に予約なく現れた防犯カメラから見える見慣れない東洋人は、申し訳ないが最初は不審者だった。ドアを開けるときは相当緊張して犯人が犯行を思いとどまるように、できる限りの笑顔を作った。その後、この博物館へ来てくれたいきさつを聞いているうちに、この人こそ求めていた人だ、と気がついた。そして途中まで説明してから館長室に戻ると、防犯カメラで君の位置を確認し、気付かれないように例の書類を見学コースのメインではなく、かつ必ず目に入る場所にセットした。君がそこへ近づくと、展示の最終チェック中だったように装って、ほんのついでのように薄汚れた書類の説明を始めた。そして、たまたま思いついたように翻訳を提案した。これが、あのときの舞台裏なんだ。

なぜ、そんなことをしたの、と思うだろうね。今書いたように、この人こそ求めていた人だ、とわかったからだよ。君がメールしてくれたストーリーは、驚くほど真実に近かった。全く恐れいっただといわなければならぬと思う。なぜなら、私の家が代々ベートホーフエンの手紙を保管してきたからだよ。二〇〇年前、村の村長をしていた祖先は、村の世話役として何かと邦雄たちの面倒をみていた。あいにく音楽の素養はなかったものの、酒を酌み交

わしながらよく語り合ったと、言い伝えられている。しっかりとした信頼関係ができた四人は、ウイーンを去るにあたってベートーフェンから渡された手紙を私の祖先に託し、そのときが来るまで保管しておいてくれるように頼んだ。保管を依頼することにしたのは君のいうように、ウイーンでこそベートーフェンの作曲意図が正しく理解される必要がある、と考えたからだと思う。

この約束はその後親から子、子から孫へとと代々大切に受け継がれてきた。世の中がどんどん変わっていく中でよく続いてきたものだ感慨を覚えずにはられない。

ところが、気がついてみると困ったことがわかった。大切に保管することは、どんな時代にあってもしっかりと受け継がれてきた。しかし、もう一つの二〇〇年前の日本人四人からの依頼である、そのときが来たら公開する、がいつのまにか忘れられてしまっていたのだよ。

そのときを待ちたくても、手紙には読めない東洋文字があちこちにあるし、手紙の中の楽譜とその周辺の文章も、音楽に縁の薄かった私の祖先たちにとっては残念ながら東洋文字と同じだった。代々大切に保存しておくことが唯一の目的になっていった。

そんなことが何代か続いているうちに二〇〇年がたった。国家機密さえも数十年たったら公開される時代になったのに、秘密どころかベートーフェンが真実が伝わることを強く望んでいたことは公開しなければならぬ。しかもこの交響曲は、名曲中の名曲として今や全世界で演奏され、聞かれている。公開されるべきそのときはよりはいくぶん遅れたものの、公開しようと決心した

んだ。

具体行動が今の博物館に入ったことなんだ。ふさわしい人に誰もが理解できる平易なことばで表現しなおしてもらいたいと思っただけでなく、音楽、とりわけクラシック音楽、それに日本の歴史のどれにも足場を持ち、そして芸術を愛する人がいるのではないかと思っただ。特にこの博物館は自由な研究が特色だったからね。あのときは、いつごろどのような経緯で所蔵するようになったのかは全くわからないといったけど、ほんとはそうではない。私が持ち込んで館長室の執務机に大切に施錠保管していた。君が他のコーナーを回っているのを館長室の防犯カメラ映像で確認しながら持っていったのでスムーズにできた。

博物館には確かに多彩なメンバーが出入りしていて、一人ひとりからこれまで足を踏み入れたことのない分野の話聞くのは大変おもしろかった。しかしこの人に、という館員には出会うことができなかった。

そんな面倒なことをしなくてもしかるべき専門機関に持ち込んだら、というかもしれない。大きな機関ならいろんな分野の専門家がいて多方面から分析してくれると期待できそうだしね。確かにそうなるかもしれない。しかし、そうならなかったときのことも考えておかなければいけないんだ。その道のプロではあってもそれぞれが個別に解釈したものを寄せ集めたとき、全体としてはちぐはぐなものになることは少なくない。会社員時代にもよくあった。そして、大きなというか権威ある機関がいったん結論を出

してしまうとそれを覆すことはとてもむずかしくなってしまう。二〇〇年も大切に引き継がれてきたものが、ガラクタ扱いになっていいものか。だから、高度な専門家でなくてもいいから、どれにも基礎知識があつて、そして何よりも音楽芸術をこよなく愛してくれる人に頼むことにしたんだ。

ところが、この博物館はもちろん、それ以外でもいろいろあたってみても望む人には会えなかった。半分あきらめていたときに君との出会いになったんだ。結論はあつけないほどすぐ出たよ。入り口のドアから展示室までの歩きながらの会話で決めた。これからファーストネームで呼んでくれ、といったのがその合図のつもりだったんだ。結果としてだましていたといわれたら謝るしかない。そういえば、君が興奮して館長室へ走り込んできて、これはベートーベンの手紙だ、と言い出したとき、私は、初めて知った表情に見えるようにずいぶん苦勞したよ。

そして、君は期待どおり、いや期待以上のことをやってくれた。ベートーフェンが伝えたかった事実と感動を、正確でわかりやすく、紙背の感情までを十分くみ取り、かつ情におぼれることなく現代人向けのものにまとめてくれた。感謝しかないよ。あつ、いい忘れていた。この件で、日本語だぶん勉強したんだ。さすがに、六〇歳を過ぎてからの全くの異言語学習は疲れた。とにかく何回感謝してもしきれない。ありがとう。

読み終えたあとで気がついた。ルイスによれば私の推理はほとんど正しかったそうだ。ということは四人の日本人が無事日本に

帰国したなら、ベートホーフエンの手紙の写しは、ひよつとしたら日本のどこかにまだ眠っているかもしれない。今度は日本での博物館探検も悪くないか、と思った。

もう一つ思いついたことがある。「不滅の恋人への手紙」のことだ。誰宛なのか、これまで世界中で多くの人がさまざまな検証や推理を行ってきた。ところで、この恋人への手紙が書かれたのは宏美やあい子たちが日本へ帰国してからそれほどたっていないときである。ということは思いを伝えたかった人の候補に加えていいことになる。それにベートホーフエンの一生をたどっていくと、恋人の存在と作曲の進捗には強い相関関係が認められる。生涯独身だったベートホーフエンが恋していた時期には、たくさん名曲が生まれているのだ。そんな彼の一生で一番作曲活動が充実していたのは、今回の交響曲を作った年だ。あの手紙には、日本からの友達ができて、と記されてあった。ルイスと私は、当然四人をさすものとした。しかし、気がついてみるとどこにも四人とは書いてない。それに「不滅の」、などという呼びかけをするのはもう会うことができない人に対してではないだろうか。これはもしかすると、と考えた。

(了)